

雑誌「手工研究」の刊行状況

佐々木 享

1886 (明治 19) 年から 1941 (昭和 16) 年までの 55 年間、わが国小学校には「手工」という教科が存在した。この教科の内容は 1941 年に始まる国民学校では芸能科の「工作」という科目に継承された。1947 年に始まる新学制のもとでは、小学校と新制中学校に「図画工作」という教科がおかれ、この教科のなかに「手工」「工作」の内容が継承された。(のち、1958年の中学校学習指導要領の改訂により、中学校の「図画工作」は「美術」となり、従来の「図画工作」のなかにふくまれていた工作教育の内容は、新設された「技術」科のなかに継承され、今日に至っている。)

「手工」あるいは「工作」の教育は、直接には、子どもたちの手の巧緻性を発達させ、ごく基本的な、種々な道具や機械の取り扱い方を教え、各種の材料をくふうをこらして加工し、ものをつくることを教えるものであるが、その直接の目的だけでなく、ものをつくる喜びを教え、道具や機械の操作を通して子どもたちに新しい世界を切り開き、集団で作業することの重要性を教えるなどの役割をもつとされ、この教科は、他の教科の教育とあいまって普通教育に重要な位置をもつとされてきた。しかしこの教科の教育は、いわゆる学歴偏重の風潮が強い社会のなかでは、創設の当初から今日に至るまで、苦難の道を辿らざるを得なかった。

ここでとりあげる雑誌『手工研究』は、手工教育に関する研究とその成果の普及をめざして創設された手工研究会が編集した雑誌であり、事実上同研究会の機関紙であった。(1941年4月号=通巻249号から『工作研究』と改題した。)

雑誌『手工研究』(改題後の『工作研究』をふくむ、以下同じ)は、1907(明治40)年7月から1943(昭和18)年8月まで37年間にわたって刊行された手工教育に関する雑誌で、手工教育史研究、工作教育史研究の最も重要な資料の一つである。明治・大正期の教育ジャーナリズムに詳しい木戸若雄によると、『手工研究』は教科専門誌としては最も早く刊行されたものの一つである。^{*} 後述のように月刊化されたのは1925年からであるが、不定期にせよ早くから継続刊行をなしたげた努力と熱意はなみなならぬものであったように思われる。

^{*} 木戸若雄『大正時代の教育ジャーナリズム』1985年、112～113ページ

しかし、今日のところ、この雑誌273冊^{*}全部を揃えている図書館、研究機関は知られていない。筆者は先年、富田馨吾氏^{**}のご好意で同氏所蔵の全冊を調査する機会を得たので、ここに、とりあえずこの雑誌の刊行状況等の概略を報告する。

^{*} 富田氏によれば、1942年7月と8月とは発行されず、また1943年8月を最後に発行されなく

なったという。しかし、'42年9月に刊行された号（この号以後の雑誌には通巻ナンバーの記載がない）にその旨の記述があるわけではなく、また'43年8月の号にも休刊、停刊とする記述があるわけではないので、これらについてはなお調査する余地が残されている。

** 富田馨吾（とみだ・けいご）1897（明治30）年9月10日 三重県津市に生れる。県立農林学校予科2年修了後、独学で小学校手工科、中学校師範学校高等女学校手工科教員免許状を取得、成蹊学園教諭、三重県師範学校教諭等を経て1961年3月まで三重大学教育学部教授。手工科関係の図書、資料を収集していたことで知られる。1983（昭和58）年3月9日逝去。

1. 手工研究会の創設と『手工研究』の創刊

手工研究会の創設、『手工研究』発刊の事情は、第1輯の「本会沿革及び行事」、第2輯の「手工研究大会記事」、森利平「手工研究に関する今昔談」などに詳しい。これらによると、研究会の創立、雑誌発刊の事情は以下のとおりである。なお森利平は1889年の手工研究会の創立発起人の1人で、手工研究会発足後は一貫して評議員等の役職にあった。東京市の赤城小学校校長、^{***}絶江小学校長を経て1927年逝去した。（『手工研究』No.89のp.33による。以下『手工研究』、『工作研究』に拠る場合は、たんにNo.のみを記す）。

1889（明治22）年8月1日より25日まで東京府主催の手工講習会が開かれ（参加者83名）、その修了者の懇親会が同年9月20日にもたれた折、その出席者（68名）の発意で、講習会の講師上原六四郎*を中心に手工研究会を発足させる相談がまとまり、同年10月17日に会則を整え、手工研究会の発会式を開いている。以来毎月1、2回の研究会を重ねてきたが、1897年には休会状況になったという。

* 上原六四郎（1848～1913）は、1883（明治16）年より東京職工学校に勤務し、1887（明治20）年、'88年に文部省が開いた手工教育講習会の講師の1人となり、手工教授法を担当した。彼は、1891（明治24）年には、東京音楽学校教授、兼東京美術学校教授となっている。この頃の手工研究会は、上原の自宅で行なわれたという（内海静「手工科建設者岡山教授の追想」No.157 p.56）。

その後、1906（明治39）年9月30日、1899（明治32）年から高等師範学校の手工科担任教授となっていた上原六四郎ら有志により、「手工教育の普及改良を図る」目的で手工研究会が再興された。翌10月17日に創立総会が開かれ、会則が決められた。のちの誌面では、この日をもって手工研究会の創立記念日（または「第2の誕生日」）としている場合が多い。（稀に、9月30日をもって第2の誕生日としている者もある。）翌1907年3月31日の第18回会合*で雑誌発行を決め、編纂委員一戸清方を中心に準備をすすめ、1907年7月に第1輯発行の運びとなった。

* 会合の回数は、9月30日の会合を起点として数えているらしい（No.1 p.177～178参照）。

『手工研究』によると、通しナンバーのついた会合は、少くとも 1913 (大正 12) 年 1 月 22 日の第 170 回例会まで記録されている。(No. 51 参照)。

当初の誌面は概ね、研究、雑報、雑録、会報等で構成されているが、第 1 輯から第 6 輯 (1910 年 2 月発行) までは、冒頭に研究会例会の討論内容が速記形式で載っている。

2. 『手工研究』『工作研究』の刊行状況

『手工研究』の刊行状況

『手工研究』は 1907 (明治 40) 年 7 月に創刊され、明治、大正年間概ね 1 年に数冊発行された。1915 年から 1917 年までの 3 年間は最も多く、年間 6 冊発行された。

1925 年 2 月 21 日の手工研究会総会で月刊化が決められ (No. 60 p. 39 ~ 40), 第 60 輯 (1925 年 4 月発行) から月刊雑誌となった。ただし月刊化されたと言っても、1925 年 11 月, '26 年 2 月, '28 年 9 月には諸種の事情で発行されなかった。通巻ナンバーは第 60 (1925 年 4 月発行) までは「輯」, 第 61 ('25 年 5 月発行) から「号」と称した。

『工作研究』の刊行状況

『手工研究』は第 249 号 (1941 年 4 月発行) から『工作研究』と改題した。これは、同月から施行された国民学校令により国民学校に「工作」が設けられたことに対応したものと思われる。

263 号 ('42 年 6 月発行) までは順調に毎月発行されたが、'42 年 7 月, 8 月, '43 年 3 月, '43 年 6 月には発行されず、第 37 巻第 6 号 (休刊ないし停刊のことばはない) (通巻第 273 号, 1943 年 8 月発行) を最後に休刊した。

雑誌の編集、発行体制

『手工研究』の発行所は、宝文館 (No. 1 ~ 4), 文美堂 (No. 5 ~ 17), 手工研究会事務所 (No. 18 ~ 59), 図画手工社 (No. 60 ~ 98) としばしば変り、発売元もしばしば変った (表 1 参照)。

表 1 『手工研究』の発行所と発売所

| | 発行所 | 発売 |
|------------------------------|--------------|----------|
| 1 ('07. 8) ~ 4 () | 宝文館 (大葉久吉) | 宝文館 |
| 5 ('09. 10) ~ 17 (14. 3) | 文文美堂 (村上孫三郎) | 文美堂 |
| 18 ('14. 5) ~ 44 ('19. 5) | 手工研究会 | 大日本図書 KK |
| 45 ('19. 8) ~ 59 () | 手工研究会 | 手工研究会 |
| 60 ('25. 4) ~ 98 ('28. 8) | 図画手工社 (佐竹林蔵) | 図画手工社 |
| 99 ('28. 10) ~ 136 ('31. 11) | (財) 手工研究会 | 図画手工社 |
| 137 ('31. 12) ~ | (財) 日本手工研究会 | |
| 262 ('42. 5) ~ | (財) 日本工作研究会 | |
| 264 ('42. 9) ~ 273 ('43. 8) | (財) 日本工作研究会 | 教育美術振興会 |

99号からは、手工研究会自営となった。

しかし、重要なことは、この雑誌が、最初から最後までつねに手工研究会（のちに工作研究会）の手で編集されたことである。つねに専任の編集者がなく、社団法人になり、発行部数が多くなったごく一時期に僅かな手当が支給されたのが唯一の例外で、終始文字通り手工研究会役員の手弁当で編集されたものであることは特筆する必要がある。

そのためミスプリが多いなどの欠陥は避けがたかったようである。（編集の実態については、たとえばNo.105の伊藤論文参照。）

発行部数

発行部数についての系統的な資料や記事はない。No.33（1917年2月発行）の記事によると、当時は概ね毎月500部は印刷されていたという。当時の会員は350名前後で、採算がとれず、100～200円の欠損があったという記録がある。ちなみに、1910年代に手工を設けていた小学校は、尋常小学校約8,500校、高等小学校約1,500校、計約10,000校に達していた。当時の手工研究会会員のうちで小学校に勤務していたのは100～200名であった。

1934年から1938年までは、毎年の手工研究会の総会で製本部数が発表されている（表2）。こ

表2 『手工研究』の製本部数

| 総会の年月 | 製本部数 | 当時の会員数 |
|----------|------|--------|
| 1934 - 5 | 1380 | 1280 |
| 1935 . 5 | 1600 | 1424 |
| 1936 . 5 | 1700 | 1493 |
| 1937 . 5 | 1800 | 1586 |
| 1938 . 5 | 1800 | 1625 |

れによると、製本部数と会員数とのあいだに大きな隔りがないこと、つまりこの雑誌が会員以外にはあまりひろがっていなかったことがわかる。

なお、1930年代に製本部数（会員数）が増大した背景には、1926年の改正で高等小学校に手工科が必修とされるなど手工科重視の気運が高まったこと——これが『手工研究』の月刊化を可能にしていた——、1931年から中学校に必修教科として作業科が設けられたこと、などの事情があった。

3. 誌面

誌面の内容の分析は別の機会に譲る。

創刊号から第6輯までは（第3輯を除く）、上原六四郎をはじめとする手工研究会幹部の研究討議の様様を速記型式で掲載していることが目立つ。その他は、手工教育に関する評論、調査報告、

実践の紹介などが主体であったといつてよい。

特集を組んだのは表 3 に掲げた 10 冊のみであった。

表 3 『手工研究』の特集号の内容

| 号 | 発行年月 | 内 容 |
|-----|------------|---------------------------------|
| 15 | 1913 年 8 月 | 特集としていないがほぼ全誌面が上原六四郎哀悼記念の行事である。 |
| 42 | 1918. 7 | 上原先生銅像建設記念号 |
| 67 | 1925. 12 | 岡山先生還歴祝賀記念号 |
| 104 | 1929. 3 | 工業化研究号 |
| 157 | 1933. 8 | 岡山先生追悼号 |
| 164 | 1934. 3 | 作業科講習会特輯号 |
| 186 | 1936. 1 | 手工教育五十周年記念大会号 |
| 250 | 1941. 5 | 阿部先生追悼号 |

なお、第 159 号 (1933 年 10 月発行) から、表紙の「手工研究」のタイトルの下に、「手工科 工業科 作業科」と小字で書かれていることが注目される。この雑誌が手工科のみでなく、工業科、作業科の問題をもとりあげていることを示唆するためと思われる。^{*}ただし、第 219 号 (1938 年 10 月発行) からこの文字が再び消えた理由は明らかでない。

*ただし、社団法人日本手工研究会定款のうちの「本会ハ、本邦手工教育ノ改善進歩ヲ図ルヲ以テ目的トス」を「本会ハ本邦工・工業・作業教育ノ改善進歩ヲ図ルヲ以テ目的トス」と変更したのは、1936 年 12 月の臨時総会においてであった。(No. 196, No. 198 参照)

『工作研究』と改題する前後から工作教育に関する記事や論文が多くなる。

4. 手工研究会の組織

手工研究会の組織、活動については、かなりの程度を誌面で知ることができる。

当初の手工研究会は任意団体であったが、1925 年に公益法人化の準備をすすめ、同年 12 月 16 日をもって社団法人手工研究会の設立が認可され、'26 年 5 月 8 日に第 1 回総会を開いた (第 71 号参照。この号定款あり)。当時の会員 500 名弱。'29 年 7 月には名称を社団法人 日本手工研究会と改称 (第 109 号による)。さらに 1936 年に目的を変更したことは前述のとおりである。また、1941 年 5 月には社団法人日本工作研究会と改称したが (第 251 号による)、この改正された定款の全文は雑誌には報告されなかった。

会長は初代が上原六四郎 (1913 年 3 月 30 日の逝去まで)、2 代が岡山秀吉 (1933 年 5 月 14 日の逝去まで)、3 代が阿部七五三吉 (1941 年 1 月 23 日の逝去まで)、4 代が板倉賛治^{*}であった。

*板倉会長の時代に雑誌が発行されなくなったので、板倉会長の終期、板倉会長以後の役員等に

については、今後の調査にまたなくてはならない。

会員数

手工研究会の総会に報告された会員数の変遷は表4のとおりである。

表4 手工研究会の会員数

| 年 月 | 人数 | 典 拠 |
|-------------|------|-------------------------|
| 1907年5月現在 | 61 | No. 1 p. 180～182の名簿による。 |
| 10. 11 末 | 347 | No. 10 p. 82 |
| 11. 11. 9. | 317 | No. 12 p. 69 |
| 14. 5. | 340 | No. 19 p. 4 |
| 16. 12. 16. | 376 | No. 33 p. 60 |
| 19. 4. 末 | 384 | No. 44 p. 52～53 |
| 23. 12. 15. | 452 | No. 58 p. 49 |
| 24. 8. | 495 | No. " p. " |
| 26. 5. 8. | 490 | No. 71 p. 37 |
| 27. 5. 28. | 572 | No. 84 p. 30 |
| 28. 5. 19. | 640 | No. 96 p. 33 |
| 29. 5. 25. | 737 | No. 108 p. 41 |
| 30. 5. 10. | 870 | No. 119 p. 45 |
| 31. 5. 9. | 969 | No. 131 p. 46 |
| 33. 5. 27. | 1112 | No. 156 p. 41 |
| 34. 5. 12. | 1280 | No. 167 p. 44 |
| 35. 5. 5. | 1424 | No. 180 p. 43 |
| 36. 5. 23. | 1493 | No. 192 p. 63 |
| 37. 5. | 1586 | No. 203 p. 53 |
| 38. 5. | 1625 | No. 215 p. 49 |

『手工研究』には、1, 18, 28, 53, 56, 59, 68, 78, 90, 101, 173, 185, 197, 209, 221 の各号に会員名簿が記載されている。(調査時期が異なるので、表4の数と会員名簿に記載された会員数とは一致しない。)このうちから会員数300名台の時期である1914(大正3)年、法人化直前の1926(大正15)年、記録にみる限り会員の最も多かった1938(昭和13)年の名簿により、会員の勤務先分布を調べてみると表5のとおりである。住所で記載されている者が20～30%に達しているから、これを別とすれば、つねに最も多いのが小学校(尋小, 高小, 尋高小)で、師範学校(男子, 女子の計)がこれに次いで多い。この両者で過半数を占めている。ただし、1938年には、中学校勤務者(127名)が師範学校勤務者(113名)を上まわっている。これは、1931年以来中学校に作業科が設置されたことと関係しているとみてよいであろう。

表5 手工研究会会員の勤務先分布 ()内は%

| | 1914年 (No. 18) | 1926年1月 (No. 68) | 1938年11月 (No. 221) |
|-----------------|-------------------|---------------------|-----------------------|
| 小学校 | 117 (35.2) | 204 (41.4) | 817 (50.7) |
| 実業補習学校, 青年学校 | | 3 | 33 |
| 中学校 | 1 | 15 | 127 (7.9) |
| 高等女学校 | 2 | 12 | 22 |
| 実業学校 | 1 | 10 | 21 |
| 師範学校 | 65 | 70 | 77 |
| 女子師範学校 | 13 | 24 | 36 |
| 高等師範学校(教師, 生徒共) | 18 | 2 | 3 |
| 外地又は外国の学校 | 11 | 31 | 98 |
| 商店 | 1 | 3 | 7 |
| その他(師範学校生徒を含む) | 1 | 8 | 11 |
| 住所のみ記載の者 | 102 (30.7) | 111 (22.5) | 360 (22.3) |
| 計 | 332 | 493 | 1,612 |

夏期講習会

手工研究会の主要な事業は雑誌の編集発行であったと思われるが、このほか、社団法人となつてからは、しばしば手工教育講習会を開催していた。名称は不統一で、第1～6回は「手工科講習会」、第7～9回は「夏期講習会」、第10～15回は「夏季講習会」となっている。会場は東京高師(東京文理大)の手工科教室で、講習の大部分は実技に関するものであった。

表6 手工研究会主催の手工科講習会の開催状況

| | 日 程 | 講習会実況等の記事を掲載した号 |
|-------|-------------------|-----------------------------|
| 第 1 回 | 1927. 7. 16 ~ 25 | No. 85 |
| 2 | '28. 7. 26 ~ 8. 4 | No. 98 No. 99 |
| 3 | '29 7. 26 ~ 8. 4 | No. 110 |
| 4 | '30 8. 1 ~ 8. 10 | No. 123 |
| 5 | '31 8. 1 ~ 8. 10 | No. 134 |
| 6 | '32 8. 1 ~ 8. 10 | No. 146 |
| 7 | '33 8. 1 ~ 8. 10 | No. 158 |
| 8 | '34 8. 1 ~ 8. 10 | No. 170 |
| 9 | '35 8. 1 ~ 8. 10 | No. 182 |
| 10 | '36 8. 1 ~ 8. 10 | No. 194 |
| 11 | '37 8. 1 ~ 8. 10 | No. 206 |
| 12 | '38 8. 1 ~ 8. 8 | No. 218 |
| 13 | '39 8. 1 ~ 8. 8 | No. 230 |
| 14 | '40 8. 1 ~ 8. 8 | No. 240 |
| 15 | '41 8. 1 ~ 8. 8 | (No. 252 に広告がのつたが、実況等の記事なし) |

終刊

今日知られている『工作研究』の最終号は、1943(昭和18)年8月に発行された第37巻第6号(通巻すると第273号)である。しかし、この号には、停刊、休刊あるいは廃刊する旨の記述はないので、まことに唐突な終刊である。発行元である財団法人日本工作研究会が解散したわけではない。終刊より8号まえの第37巻第5号(通巻すると第271号)から本文32ページという薄いものとなっていたから、用紙事情が悪化したのかも知れない。

しかし、敗戦後にも復刊した様子はない。37年の歴史をもつこの雑誌も、他の多くの雑誌と同様、戦時下に消えていったのだった。

5. 『手工研究』『工作研究』の所蔵状況

この雑誌を富田馨吾氏が全冊所蔵していたことは前述した。現在は御子息の弘氏が管理しておられる。名古屋大学教育学部には、現物が159冊所蔵されている。欠落の号については生前の富田氏のご好意でコピーさせていただいたので、名大ではいちおう全冊を見ることができる。森下一期氏が約100冊所蔵している。森下氏の場合もそうだが、65号あたりまでの初期の号を欠いている場合が多い。